

仏教の社会福祉に提言する

高 橋 良 和

(仏教大学講師)

今日の寺院は安定している

仏教のおしえは、慈悲を説くおしえである。

これを説く限り、仏教は如何なる時代においても、社会に対応し、その福祉を考えるべきであるといえる。

明治五年（一八七二）時の大政官布告（今の文部大臣）によって、制度の改革が発令され、当時寺院が受けもっていた戸籍は、町役場に、そして寺小屋という児童の学問の場は、それが小学校に移った。

寺院としては、これは大変な打撃であって、戸籍と学校がとりあげられ、その上排仏棄釈のあぶりを食って、寺院は廃寺となり、あるいは神社といっしょに合併し、僧侶

が、神官になったりして、とても痛手をうけた。

その痛手をうけたときに、寺院は、自営のためにやむ得ず、仏事、特に法事と葬式とによって収入を得なければならなくなった。生きるための手段である。

それからというものは、今日まで法事と葬式に明け暮れして、寺院本来の布教と教化を忘れ、まるで情性によって生きるというみじめなことになってしまった。

当時の例の一つに、奈良の法相宗の興福寺の僧十六名が、春日神社の神官に転職して、世の中の寺院への風あたりを避けたことがあったし、京都でも咸神院という寺であった今の八坂神社から、寺院が追い出されてしまい咸神院が亡びたという例がある。そして僧侶は還俗して生活を支

えたというようなことは、各所にみられるようである。

戦時中は、寺院もなんとかその経営の中心が、仏事、葬式に頼っていたが、終戦は、宗教団体法から、宗教法人令、さらに現在の宗教法人法によって、法人化したことによってその経営がおちつくとともに、教化と結びついたかたちで、保育園、幼稚園が併設されて地域社会への奉仕の意味もあって住職、そして寺族は、その経営者として奉仕活動することによって、地域社会への接触を含めて、寺院の経営への多少の足しになるようになっていくが、それも学法、福祉法人化への国の方針が、どんどんと迫ってきて助成金や研究費などの補助で学校法人、そして福祉法人になっているところが多く、個人経営や宗教法人の経営は、だんだん少なくなってきたのが現実である。

このようななかで、寺院の経済は安定してきた。もし不安定であっても、住職や寺族は、兼職することによって、あるいは学校に、また公務員になって、住職の生活は、昔に比してうんと楽になっているのが、その現実であるといえる。

しかしこのようなことは、直接、福祉や教化の問題でな

く、むしろ寺院や住職の収益につながるものであって、戦後の混乱と価値観の変化のなかに、寺院だけが、安定した生活を送ることが出来たので、寺院は事業母体になり、一方その檀家組織を定着させて、表面は安定性のある存在となったのである。

こうした寺院の在り方は、よいか悪いかの判断はさておいて、現代に生きぬくためには、その展開をどうするか、それが今日の課題である。

無縁の大悲の心

この稿の冒頭に慈悲について一、二行書いた。

さてこの慈悲のことばは、仏教の専門語であって、おそらく他教が、この慈悲のことばを使ってもそれは似て非なるものである。

釈迦八十年の生涯は、この慈悲の具現であったと思う。

よくこの慈悲について、「愛」ということばと混同して考えている人が多い。慈悲も愛も同じことであるなどと思っ
ては大変である。

全く異質である。

愛はキリスト教で用いる。神の愛をうける。

我が隣人の愛をうける。人を愛するなどというのは、神からその恵みをうけることであり、隣人を愛するということも、自分の身近い人に対してあたたかく接することである。

しかし愛は、精神的な面でもよい、心の中にその人を愛する、それだけでも愛の心をもつことが出来る。

慈悲はこれとは異なる。

慈悲には三つの種類がある。その一つは衆生縁の慈悲、次は法縁の慈悲、そして無縁の大悲である。

しかしこのなかで一番初步の慈悲は、それは自分の周囲の人々に心をむけることである。これは一番やさしく誰でももつことが出来る。

その次は法縁の慈悲である。これは人々とき合ううちに、それらの人々の心や行動をみて自分の生き方を考えていこうということである。

そして最後の無縁の大悲というのは、慈悲と言わず大悲というところに意味が深い。これは自分の知っている人、または知らない人に対してやむにやまれぬ心から、救って

やらなければならないという心になって行動を起こすことであるといえる。

ただ慈悲というが、釈迦は慈と悲と二つを分けて説いているので、その二つが一つになって慈悲ということが出来たようである。

人の悲しみ苦しみを聞いてその心になること、すなわち同情することが一つであって、その悲しみ、苦しみをみて、まことに気の毒である。同情申しあげる、その心から出発して、それならどのようにしてその悲しみ、苦しみを除いてあげようかと苦心して、自分で出来ることならと行動に移すことが、一つになって慈悲となった。

しかしそのときこの慈悲を、それを行った人が恩と感じ、よくしてやったと心に思うということになると、それは慈悲ではないと言われている。

よく恩にきるといわれるが、それは慈悲をうけた人が、恩を感じることであって、慈悲をした人が、心にそのようなことを思うことは、仏の慈悲ではないと思う。

それが仏の慈悲であり、無縁の大悲なのである。

至難無道禪師という僧侶は、

仏道も修行する人身のあくを去るうちは苦しけれども、去りつくして仏になりてのちは何事も苦しみなし、慈悲の熱するとき慈悲を知らず、慈悲して慈悲を知らぬとき仏と言うなり。

と言うているが、この「慈悲して慈悲を知らぬとき仏というなり」というのは、人に慈悲してこれは善通のことであるのに、慈悲と言われるのが、ほんとうの慈悲の心であるということ、計算づくめの親切やその行動は、ほんとうの親切ではない。なにをしたかも知らず、ただただ他人の悲しみを知って、行動に移してその人をしあわせにする、それが慈悲であるとおしえている。

計算づくめの慈悲は、仏の慈悲ではない。

すべては自我の区別なく無心である。これこそ無縁の
大悲という。

慈悲の心は、このようであるが、もし愛の心になると、おそらく恩を感じてくれなことがあると、それは憎しみに変わることになる。

このような親切やさしい心でみちびいてやったのに、なんの感謝もしてない。そういったことになると、それを

思うとき不愉快になり、あるいは却って恩を売るようなことにもなりかねない。

無縁の大悲ということばは、仏のおしえのすがたである。慈悲を示してくださっても、それを自分で意識されないところが、仏の心である。

この慈悲の心から出発するのが、仏教の教化であり福祉であるといえるのではないか。

慈悲は仏教のおしえの眼目である。そこが原点となって福祉への出発を考えてみたい。

宗門人は病人である

ある教団では自らの教団を教化宗団と呼んでいる。

またある教団では、福祉教団と呼んでいる。

複雑な今日を生きのびようとする一つのあらわれであるともみる。

一つの法要、遠忌を機会に、檀信徒へのアピールを考え、あるいは所属する寺院に対して一つの目標をたしめることによって、法要、遠忌の円成を考え、募財への協力を求めようとする姿勢であるかのようにも思えるが、しか

しそうした呼びかけについて、果たしてどれくらい前向きに考えられて、そのキャッチフレーズに応じているか、それが問題である。

一方宗派内の寺院は、このような呼びかけに対して全く無関心であって、法要、遠忌が終ったあとは、むなししい呼びかけの跡始末も出来ない。

いわゆる教団内において危機感がないといえる。

特に次の世代を荷負う、いわゆる寺院の後継者には、全くこの危機感がない。昔、真宗寺院以外の教団では、子弟制度が存在していて有縁無縁にかかわらず弟子を養成し、その師匠及び檀信徒が負担して、京都や東京の宗門大学に入学させていた。それであるから、弟子になったときから、慣れない寺院の生活に苦勞しながら、勉強すること、それ自身の心のなかに、僧侶としての決意がもたれていたと思うが、今は異なる。

このような子弟の制度は、だんだん崩れてきて今はほとんどが家族制度となり、いわゆる吾が子が、後継者に予定されてきている。

それがためには、子供の方だって出来るだけ楽な道を歩

むことを考え、師僧もあまり苦勞させたくないという考えが先に立っているのです、これらの宗門大学の学生は、割合に経済も豊かに青春を謳歌することに心がむけられて、全くの心の中に、危機感はない現状である。それが卒業して住職になる。寺院は教化、布教、そして福祉などのことは、全く彼方にいつてしまって安住している。

食っていける、じっとしていてもあの大きな伽藍のなかにいれば、自分の一生、そして家族も安全であるという考えが先に立ってしまっているから、危機感が湧いてこない。

こう考えてくると、寺院は過去の檀信徒対象の教化からぬけて、現実今日の世代に生きるのには、どうすればよいのか。

しかしこうした今の若い世代の人々のなかにも、これではいけないと感じている人もいる筈である。

情性で寺院生活を送っていて何も感じない人がいるなら、これこそ寺院は、なすすべもなく、崩壊していくであろうことは目にみえている。

このときに寺院は、どうすれば生きぬいていくか、それ

を考えてみたい。

浄土真宗本願寺派、すなわち西本願寺が、現代の教団は、どれくらい病み疲れているかを日本能率協会に依頼して宗派内の調査をしたことがあった。そのときの結果について同宗では、「宗門人は病人であり、憂慮すべき状態である。早く対策を立てなければならぬ」と言っている。

そして問題点として、

○数百年の伝統にしみこんでいる経営体質の清算

○門信徒組織の再編成

○教義解釈と布教方式の改革、寺院を布教基地とする再

配置

○僧侶の再教育

○宗門全体の共通目的の設定

をあげている。

これらの問題点は、別に新しいことではない。

しかしいつの時代においてもこのような問題は、教団がつづく限り、つきまわることであるといえる。

寺院の副業的存在

各教団の寺院総数は、七万カ寺である。そしてそれらの教団の僧侶は、二十万人といわれている。これは大変な数であり、この七万カ寺が、なにかで大衆と接し、そして二十万人の僧侶が、地域の第一線で活動しているということであると、新宗教といえどちょっと太刀打は出来ない。

しかし残念ながら、この二十万人の僧侶のなかに、真にその地域のなかにあってリーダーとして信仰を説き、信心をすすめるために、自ら実践行をしているかということになると、残念ながら何人いるか、ということになると、大いに反省してみたい。

このような心の世界に対して、戦後は幼稚園、保育園の開設が多くなってきた。おそらく四千万以上の園が、設置されている。それらは、

広い境内があること、

資金が割合いに集めやすいこと、

住職・寺族の兼職として、収入になること。

こうしたことが、ほとんどで、幼稚園、保育園が、設置されてきている。

しかしこれとて現在頭打ちで、幼児の減少から、廃園、

休園になるところも、地方においてはあるようである。

しかしこれらの施設は、寺院の副業としていわゆるかっこいい施設であって、地域においては、その地域の人々との接触があり、またその接触を通して、教化との結びつきが考えられることと、その保育内容に仏教的なものを加味して、いわゆる小さいときから、子供を寺院に出入りさせ、且つ仏さまを礼拝することをおしえていることで、将来これらの子供たちが、大人になったときに、多少とも仏教寺院と縁を結ばしめるという点では決してマイナスではない。

しかしこれらの施設は、教化であって、福祉とは、多少その異なりをもっている。

もちろんこのような施設のなかで、いわゆる福祉の事業を併置しているところもあるが、それは施設の活用であるから、目標をはっきりさせているところがあれば、それはそれなりに地域社会から、期待をかけられていることにおいては、一つの試みとして大いに賛成したい。

人間のしあわせにどう対応するか

今後の寺院の活動について、二つの面があると思う。

一つは、仏教の理念をつたえる、いわゆる教化といった面ですむのか、もう一つは、行動を中心とした在り方によるべきか、この二つである。

理念による教化は、今日まで各寺院で実施しているが、行動を通したということになると、そこに社会福祉がある。

住職のうちには、教化活動よりも事業中心の社会活動に目ざめている人も多い。現在は幼稚園、保育園がその対象となっているが、これは先にのべたように経済的理由が多いが、戦時中までの社会福祉事業としては、老人福祉や身体障害者、女子福祉、児童福祉などがほとんどで、特に老人福祉については、仏教の施設が、非常に多かった。

仏教のおしえは、他教のそれに比して一ばん福祉の面が、その教義のなかにふくまれている。

病氣癒し、災難を駆逐するなど新宗教のなかには、それぞれ眼前の問題をとらえて入信をすすめているが、世の中のしあわせ、人間の幸福を追求するのは、仏教のみである。直接病氣を癒すことではなくて、その心の根源への治

療であるから、現世祈祷的なものでなく、釈迦の悟り以来二千五百年の間、じっと大衆のしあわせを説いてきた。

六波羅蜜のおしえなどは、何千年来変わっていない。しかしあのなかにある「施」という思想は、明らかに世の中のしあわせ、人類の幸福のために、仏教がなんとしても手をつけねばならないおしえである。

このときに寺院が、果たして自心の悩みや苦悩に答えてくれているか、それが問題である。

新宗教はムードに酔わしめてさも救済したかのように世の中の人々に思わしめるが、真の救済ということになると、ほんとうに安堵感があたえているかということが疑問であると思う。

刻々と進歩する変動の社会のひずみのなかにあって、何かを求めたいと思う人々が多くなっているのは事実である。

そのときに寺院が、住職が、その悩みに応えられないとなると、仏教の存在意義がなくなってしまう。

そうなってくると、現代人は、仏教から離れていく。

その反面、若い世代の人が、仏教から離れているのは、

教団や寺院が、概念的であって、伝統的な形式だけで、当面の問題を忘れていくからである。

教団も住職も、ぬるま湯につかって檀信徒を導こうとしていることは、とても耐えられないと思う。

教化の中には、出かける教化と、迎える教化とがある。現実今日の寺院の本堂は、二十人、三十人の檀信徒が参詣するだけで充分である。

試みに戦災地の復興寺院の本堂は、ほとんどが、縮少されていてそれで用を足しているし、また新築の寺院もそのようである。檀信徒を対象とすると、それでよいのである。

これは迎える教化であって、従来の寺院として教化するだけならこれでよい。

寺院のなかでは、この迎える教化が、寺院の教化であると思ってもらっては困るので、そこに出かける教化、いわゆる地域社会に赴いた福祉と結びついた教化、すなわち地域と結びついた社会福祉が必要になってくる。

僧侶は現実から逃避してはいけない。

もっと時代の息吹きを感じて、生活の場における布教が

必要であるといえる。

時代から逃げて一人山に籠って念仏し座禪する。それが仏教本来のすがたであると考えることも間違ではない。

しかし生きた人間を対象とする点において、自分のそうした生活は、一つの模範になるかもしれないが、若い世代の人々のなかに入って導くことにはならない。

僧侶の聖なる指導というのは、明治まではそれでよかったが、現代では通じない。

いわゆる出かける教化、地域の社会福祉へ、自らが出かけて仏教の布教にあたるべきではないか。

出かけるということは、寺院から外に出るという意味だけではない。人間のしあわせに向って僧侶は、どのような役割をもつかという意味でもあるし、また檀信徒だけに依存する教化の対象を地域の福祉にどのように奉仕するかということ、積極的な姿勢を表現したこととして受け取ってもらいたい。

出家の理念は福祉につながる

仏教、特に寺院と僧侶は、今世の中から、期待されてい

ない。これはまことに失礼なことかもしれないが、これは僧侶の風俗化に對してである。法衣をまっとうしていない僧侶は、世俗化して聖職者としてのかたちや行動をとっていない。法衣をまっとうしたときだけである。

これでは一般の人々から、期待もされないし、坊さんも人間であるということになる。

そうなると、僧侶は考える必要がある。

今戒律を守り、超世俗的な生活に還れということではない。

鎌倉時代の祖師たちは、勉強と修行に明け暮れていたし、すばらしい行をもっていた。こうした勉強をつづけ、行をつづけた僧が新しいおしえを開いたのである。それとは反対に俗の人々は、勉強することもなく、修行することなく、それらの祖師や弟子たちのおしえと道すがらに對して敬虔な合掌と帰依の心で仰いだのである。

しかし今は異なる。僧侶が勉強しないで、俗人が勉強している。全部が全部でなくても、僧に帰依する心をどのようにして信者にアピールするか、俗人と同じ僧では、形式化した法事、葬式だけで招くことになりかねない。

そこで僧侶は、非俗性というのか、あるいは出家の理念を生かすこと、それを寺院に生かすこと以前には方法がないといえる。

仏教が世俗的な権力によって支配されてからは、僧侶はその指導力を失って、世俗におちてしまった。

財施をうければ、それを法施として檀信徒にかえす。いわゆる教化、布教、福祉といったかたちを変えた仏教活動として使用しているだろうか。

伝教大師最澄は、

道心の中に衣食あり、衣食の中に道心なし。

とおしえている。

何事も自主生活にあてている今日、道心がうすれているのも当然であり、それが社会から、僧侶が敬まわれなくなったことであろう。

そういうことからして、今日の仏教は、人間のしあわせにどのように取り組み奉仕するか、そのことにかかっているといえる。

そんなとき、学問と修行をして、自らがプロの僧侶として、真に社会を指導する人になるかどうか。

僧侶はプロである。生半可では人々の信頼を得られない。

そして世の中の人々のために損得を越えた献身的な社会福祉、あるいは福祉事業をやることである。

プロの宗教家であることを忘れている僧侶が多いのにおどろく。衣を着たときだけお経を思い出す僧であっては、現代に生きる価値がない。

現代の人々は、幸福を求めている。今日の寺院生活のなかで育った僧であるから、百八十度の転換は、無理かもしれない。

しかしこのようなことであれば、今からでもすぐ出来る。それは僧侶の生活の簡素化、献身的な奉仕、それは檀信徒だけでなく地域社会への奉仕、寺院の開放、そして社会的な地位から離れて、真に僧侶としての奉仕の生になることである。

しあわせをどのようにつかむか、それに対応しているのが、新宗教である。そしてその内容は、まことに浅薄である。それを知りながら、入信していく人を笑ってはいけない。

僧侶に対しての依りどころを失っているからであると反省して、献身的な奉仕行が、社会的な信頼につながるのではないか。

現代人の苦しみと、病めるすがたをみつめてもらいたい。

するとじっとしておられない衝動を感じるときに、そこから福祉に向って立ちあがる心が湧いてくると思う。